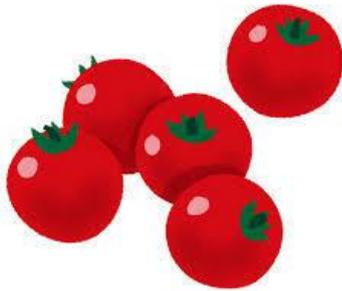


## ミニトマトの雨よけ栽培

西 真司



# 脇芽取りは晴天下で

ミニトマトは、実の大きさ40g未満のもので「プチトマト」とも呼ばれ、一般の大玉トマトより糖度が高いです。原産地は日照量が多く雨が少ない南米アンデス高地ですので、雨に当たるのを嫌います。

これからの栽培は、梅雨や高温乾燥、秋雨などを経過するため、病害の発生抑制と品質の向上を図るために、雨よけトンネルやハウス栽培が望ましいです。ほ場は土壌水分が多いと草勢が旺盛になって果実の付きも悪くなりやすいので、日照条件がよく排水が良い場所を選び、さらに、ほ場周囲には溝を掘っておきます。また、定植3週間前には完熟堆肥を施用し、土壌の通気性や透水性の改善により根が広がる環境の改善を図っておきます。

露地栽培の定植時期は4～5月ごろで、黒マルチをするか敷きわらをしておきます。定植は株間40～50cmで、作業は晴天の穏やかな日を選び、定植後は直ちに根締めのためのかん水を行います。

元肥は1平方mに化学肥料（窒素、リン酸、カリ各15%の場合）を50g程度施します。追肥は1回目を1段目の実が膨らみ始めた頃に、2回目を3段目の実が膨らみ始めた頃に、1平方mに化学肥料（前述同割合）を13g程度施します。その後は開花した花房の茎径が5、6mm以下と細くなったり、茎の先端近くで花が咲くようになったら草勢が落ちてきた証拠なので液肥（500倍液）で追肥を行います。

苗を植え付けてから、根がしっかり張ってくると生育の勢いがついてきます。葉の成長と花の成長を同時進行させながら実をつけるためには、茎が小指の太さにとどまるように草勢を維持します。

そのための方法の一つとして、葉の付け根から出てくる脇芽を取り除きます。この作業は葉が茂りすぎて栄養を使ってしまうと実が着きにくくなることと、風通しが悪くなって病気が出やすくなることも防ぎます。このちょっとした管理が重要になってきます。ただし、雨の日にこの作業をすると逆に病気になりやすいので、晴れた日に行うようにしましょう。

夏秋どりは開花後50日前後で収穫できます。赤く色づいてから収穫すると、甘くこくのあるおいしい完熟の果実が採れます。

（鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部野菜研究室研究専門員）

